

手記

シベリアに埋めた青春

北海道 渡辺 照 造

私は、昭和二十（一九四五）年八月十五日を、中部千島の得撫（ウルップ）島の旅団司令部で迎えた。

この年の五月、得撫島の四十二師団が、宗谷海峡防衛のため北海道に移駐し、その後に残置部隊で独立混成十九旅団が編成された。

陸軍兵器学校を四月に卒業し、旭川の留守師団にいた私は、この旅団司令部に転属を命ぜられ、六月に小樽よりオホーツク海岸沿いに敵潜水艦の

噂に怯えながら島に行った。

島の中央部にある司令部付近は千島桜が咲いていたが、日影にはまだ残雪があった。

北千島への空襲等あっても、ここでは敵の姿を見ることもなく、緊張感はあってもまだ静かな状況であった。

そうこうしているうち、八月六日の広島への原爆投下、情報班より回ってきた戦訓には「新型爆弾」という言葉を使っていたように思うが「被害甚大である。対策としては白い敷布等身につけよ」とあったのを覚えている。続いて長崎への原爆投下、ソ連の参戦があり、さすがにいいよという気持ちになった。

終戦の二、三日位前と思うが、特に用もなかつ

たが通りすがりに通信隊の兵舎に立ち寄った。下士官が一人、短波放送を聞いていたが、日本が戦争に敗けたと放送している。今でも忘れられないのは「かくして朝鮮同胞は日本帝国主義者の手から解放されたのです」という一節である。

戦局芳しからざるのは薄々感じていても、ポツダム宣言や終戦交渉等知らない者にとっては、敵のデマ放送に他ならない。

「あんまりデマ放送を聞くなよ」と言つて兵舎を出たが、朝鮮解放の一言だけは妙に印象に残つた。

十四日になり、「明日正午、天皇陛下より重大放送があるので、将校全員、将校集会所に集合のこと」との連絡があり、当日、司令部付近の各隊の将校も集まり、全員、威儀を正して整列をした。

中央テーブルの上のラジオからは、雑音の中にかすかに「君が代」が聞こえるだけで、肝心の陛下の声は何も聞こえない。結局、何のことやら分

からぬうちに放送は終わり、我々は、ソ連も参戦したことだし、時局重大の折、一層頑張るようだということだろう等と話し合い、旅団長もそのような意味の訓示をして解散した。

何も知らないということは恐ろしいもので、この期に及んでも日本は敗ける等と思っている者はいなかったのである。

しかし、部屋に戻るとどこからともなく、日本は敗けた、無条件降伏したとの話が伝わって来た。そんなバカなと頭の中がカツとし、思わず刀をつかみ外に飛び出した。刀を振り回し木の枝に切りつけた。二枝、三枝よく切れた。

人間とは現金なものである。前日にはいつときかは自決すら考えていた者が、翌日になると、もう日本に帰ることを考えている。

経理より慰問袋の配給や任官手当千円余りを貰った。今まで食い延ばし作戦で儉約していた食料等も大盤振る舞いとなる。谷間の木の間を書類を焼く煙がただよう。

しかし、北千島でのソ連軍との戦闘が伝えられて来て司令部の空気は一変し、和戦両様の態勢をとることとなった。

数日後、占守島の缶詰工場の女子従業員が島を脱出、無事根室に着いたとの連絡も入り、皆で「よかった、よかった」と話し合った。

やがて北千島での戦闘も終わり、再び武器弾薬の集積作業が始まった。ソ連軍の南下が始まり、今日はどの島にきた等の話が伝わる。

得撫島にソ連軍が来たのは、私の記録では八月三十日の夕方である。

島の北東部は東雲原といって飛行場がある（飛行機はないが）。この付近のある隊で弾薬集積中、爆発事故があり、兵数人が吹き飛ばされ死亡した。その後始末を命ぜられてすぐ現場に行ったが、現場は直径五、六メートル、深さ二メートル程の穴があき、付近は小銃弾や手榴弾が散乱し、十メートル程離れた木の根元に千切れた軍靴が転がっていたり、木の枝に服の切れ端が引っかかっ

ていたりしている。

後始末といっても、とにかく、みな穴にほうり込み土をかけるなどただけである。このことで東雲原にある兵器班の倉庫詰所に二日程いたときにソ連軍が上陸して来たのである。

夕方、岩見浜にいた兵が「ソ連軍が来た」と言って戻って来た。別に戦闘をする気があるわけでもないのに、その夜は緊張しながらもそのまま寝ていた。夜の十時頃、入り口の戸を乱暴に叩く音がする。来たなと直感したが何をしてよいか分からぬ。ただ、軍刀を持っていかれたら困ると、咄嗟に軍刀を床下に隠し戸をあけた。

数人のマンドリン（自動小銃）を持った兵隊が入って来たが、特に殺気立った様子もない。言葉は通じないが身振り手振りで何かを言う。懐中電灯を持って倉庫に案内すると、品物を引っくり返したり箱をあけさせたりする。そのうち、赤い布を見つけ、それだけ持って引き揚げた。さすが赤い国の兵隊だけであると皆で大笑いとなった。私の

所に来た下士官らしき兵が地図を広げ、しきりに指をさす。場所の確認かと思いのぞいて見ると、東雲原がローマ字で「ヒガシクモハラ」となっている。「ヒガシクモハラ」でなく「シノノメハラ」だと言ったが、果たして理解したかどうか。

ソ連軍としては何か占領のセレモニーがしたかったのか、翌日、付近所在の兵が武装解除のため東雲原に集められた。武装解除といっても、武器弾薬はすでに集積済みなので、映画やテレビにあるような小銃を積み重ねて行くという風景もなく、整列している日本兵の前をソ連軍将校が歩いただけである。

通訳に、漁業関係でカムチャツカに行ったことがあるという下士官が一人側にいて、何を言っても聞いても、ただ「ダー、ダー（そうだ、そうだ）」の一点張り。

武装解除後、私は兵器班の兵数人と司令部に戻った。司令部では、停戦交渉というか部隊の移動というか、ソ連軍との話し合いが行われたが、

通訳の下士官に将校服を着せたとか、ソ連軍の船の上でウオッカがどうしたとか、食堂の雑談の中であったが、直接の担当ではないので具体的なことは分からなかった。

希望の日本に帰る日が来た。司令部関係は十月二日、見島湾に集結した。乗船前に荷物検査があり、検査官の将校が欲しいと思う物を放り出す。あたりには没収された服、靴、日用品等の山ができていた。私もゴム長靴を取り上げられ、一瞬「この野郎」と思ったが、急いで荷物をまとめ大発に乗り、沖合いの船に向かった。

船倉は北千島からの先客で満員である。ソ連側も船中の暴動を恐れてか、警戒兵をはじめ皆が「トーキョーダモイ」を繰り返していた。

船は十月六日、大泊（コルサコフ）に着き下船、丘の上の学校まで歩かされたが、歩いているとき、誰か知っている者はいないかと列をのぞく人、家の中から窓を小さくあけて見ている人、中には髪を短くしている女の人もいた。

数日後再び乗船、今度こそ日本だ、の喜びも空しく船は間宮海峡を北上する。船には北千島の二個大隊に得撫の将校数十人が加えられた。

甲板上では相も変わらぬソ連兵の腕時計の略奪で、中には三つも四つも腕につけ自慢げな顔をしている奴もいる。

私の記録では十月十二日、復員局の記録では十月十九日の夕方、船は埠頭に横づけされた。アムール（黒龍江）の河口の街ニコライエフスクである。河幅は三キロメートル位あった。

ニコライエフスクは、シベリア出兵のとき、尼港事変のあった街として名前だけは知っていた。

（以下、尼港と書く）

ラーゲルは、海軍第三工場で働く囚人用ラーゲルの半分程を更に有刺鉄線で囲い直して日本兵用にしたもので、塙の向こうから彼らの声も聞こえる。

一夜明けて見ると外は一面の霜柱。寒い。北緯五三度の十月とあれば当然だが、もう焚き火をし

ている者、携帯食料で炊事をしている者もある。そのうちソ連側より火を消せと言ってくる。テンヤワンヤである。

炊事係もいるがさっぱり食事にならない。ソ連側では、日本兵は食料を持っているから出さないとのこと、実態はまだその態勢ができていなかったのではと思うが、とにかく一日ほどは出なかったように思う。

ラーゲルの四隅には監視塔があり、警戒兵の二十四時間立哨はどこも同じである。建物は丸太組みで、明かり取りの窓が数カ所、電灯は六十ワット位のが三、四個、採暖はペチカ、寝台は板敷きの上下二段、一室に百人以上である。

日本側も態勢作りに忙しい。幸い通訳には四十歳位の地方人で、日魯漁業の吉村さんがいたので早速折衝に当たってもらうことになった。日本側の総責任者には、若くて恰幅がよく押し出しのきく桑田中尉になった。

私は及能中隊の第三小隊長となったが、どうし

てか分からないが、得撫の旅団司令部関係で尼港に來たのは私一人だけだった。

二日ほどゴタゴタしていると作業命令が來た。早速指揮班が人員割り当てをする。記念すべき？ソ連での作業第一日目のことは今でも思い出せる。

作業総指揮官はT中尉。兵を連れた各小隊長が衛門前に集合する。人員点検のためのソ連側將校と共に日本側の指揮班もいる。

まず第一の混乱が始まった。当然のこととして我々は四列縦隊であるが、これが相手に通じない。五列に並べと言う。兵隊は「何だ、ロシア人は九九も知らんのか」と文句を言うが、ともかく五列に並び直して衛門を出る。ソ連側將校は指さしながら「五・十・十五」と数え始める。数えているときに誰かが何かを話しかけようものならさあ大変、数えた数を忘れ「ナザート ビストレイ ダワイ（急いで戻れ）」となり、バックしてもう一度数え直しとなる。これを一月、二月の極

寒期にやられると全員泣きの涙である。

何とか衛門を出て道路上に整列した。犬を連れたカンボーイ（警戒兵）は「ダワイ ダワイ」とせきたてる。T中尉はやおら腰の軍刀を抜き放ち、大声で「本日の作業指揮はこのT中尉がとる。作業内容は港にての荷役作業。では、これより港に向かって出発」とやったのである。多分、カンボーイもビックリしたに違いない。

我々も全員軍刀を吊って行つたが、このスタイルは数日にして止めてしまった。それは現場に行くと、ロシア人が「サーベル サーベル」と珍しがり、入れ代わり立ち代わり軍刀を見せろと言う。中には切れるのかと刃に指を当てる者もある。ウルサイのと危ないのとで持つて行かない方がよいと丸腰で行くようになったのである。

この軍刀は、半月か一カ月位した頃、作業に行っている間に所持品検査と称して全員の軍刀が没収されてしまった。

十月二十四日、樺太より一個大隊千人、十月二

十九日、旧満州佳木斯^{ジャムス}より一個大隊六百人（四百人は少し上流のマゴークか）が加わり、四個大隊三千六百人の大ラーゲルになった。ソ連側では四個大隊なので、桑田中尉を連隊長と呼び、階級も勝手に大佐にしてみました。ポツダム大佐ならぬスターリン大佐の誕生である。

そのうち、特別の作業場は別として二十人前後の小隊単位で作業に行くようになり、各作業班の作業現場も固定してきた。

所内勤務や病人を除いても三千人近い日本兵が小さな港町で作業をする。その内容は、荷役、建築、道路補修、碎石場、川沿いの各工場内の作業。夏期には農場に行くこともある。

私の作業班は、ここでの一年六カ月の殆どが海軍第三工場であった。この工場は船舶修理用の掘り込みドックを中心に、それに付随するボイラー工場、製材所、修理工場、倉庫等で、この工場内ではいろいろな作業をした。

工場内では一般ロシア人の他、囚人も働いてい

る。何かの都合で囚人と一緒になったら大変である。手袋や飯盒等、ちよつと目を離すとすぐ盗まれる。追いかけたつてまずは駄目である。カンボーイに言つても「アキラメロ」の一言で終わりとなる。

シベリアでの抑留生活は、飢餓、重労働、酷寒の三重苦と皆が言う。後半はこれにシベリア民主運動が加わる。受け入れ態勢の整っていない入ソ当時と最初の冬は特にひどかった。朝、小豆が飯盒の中蓋に一杯。これに雑穀や野菜まじりの水っぽいスープ。昼、薄い黒パン二枚（場所によってはラーゲルからスープを運んでくる）。夜、黒パン二枚とスープ。こんな具合のときもあった。

食べた途端、もう空腹を感じる。万年飢餓である。これで強制労働を強いられれば痩せる一方である。水でのばしても、野草をあさっても限度がある。栄養失調にならない方がどうかしている。

二十一年になってから、全般的に少しずつ改善されて来たが、シベリア全土で死亡者が一番多

かったのは二十年の冬だった。

若者の集団では猥談は付きものかと思うが、それどころか話はいつも「寿司が、汁粉が、ボタ餅が食いたい」である。最後は、「銀シャリに味噌汁、沢庵を腹いっぱい食えたら死んでもいい」が話の落ちとなる。「武士は食わねど高楊枝」などというのは、極限の世界では通用しない。

冬期間のシベリアでは、まして捕虜の身分では生野菜等お目にかかれない。当然ビタミンC不足となる。足が少し重くなる。軍医の間でも話題となり、ソ連側より対策を教えられる、「松葉油を飲ませよ」と。

松葉油とは、ボーチカ樽の中に松の葉を刻んで入れ、これに熱湯をかける。松の葉の成分が滲み出る。この中にビタミンCがあるという。これがもの凄く生臭い。鼻をつまんで飲んでもなかなか喉を通らないという代物である。

早速作って食堂の入り口に置き、食堂に入るとき必ずコップ一杯飲むようにしたが、腹に入る物

なら毒茸でもOKというつわものも、飲まずに済むなら飲みたくないと素通りする始末。遂には入り口に監視がついて、飲まなければ食堂に入れないと強制的に飲ませた。そのせいかどうか、その後壊血病の話はあまりなくなった。熱湯とビタミンCの関係は？ などと誰も言わなかった。

日本人はチフスといえば腸チフスを連想するが、ソ連でチフスといえば発疹チフスのことをいう。発疹チフスの媒体はシラミである。捕虜とシラミ。これは万国共通、切っても切れない関係にあるのだろうか。狭い所に多勢押し込める。着替えるもなく入浴もない。洗濯もできない着たきり雀。これでシラミが発生蔓延しない訳がない。

夜、寝台に横になる。待つてましたとばかり南京虫とシラミの攻撃である。かゆい。見当をつけて指をシャツの中に入れる。探るとまず空振りはない。指先にコロツとしたやつが触れる。ご主人様は痩せて栄養失調なのに、こいつは栄養満点、丸々と肥えている。

昼間、シャツを裏返して縫い目を見るとビツクリする程の卵の行列、シラミをはたき落とし卵を潰してまたシャツを着る。

ソ連式シラミ退治法は、零下二〇度以下の日に、戸外で布きれや衣類を広げ寒気に晒す。何時間かしてから見ると、シラミは凍死して白くなっているが、卵にはあまり効果はなかった。

二十一年頃から週に一度位バーニヤ（風呂）に入れるようになった。しかし、風呂といっても小桶に湯を二杯位貰って体を拭くだけである。それと、バーニヤの隣に熱風乾燥室ができ、夜は作業で濡れたカートンキ（フェルト製の長靴）を乾かし、昼は衣類の滅菌乾燥をしてシラミ退治をする。これで漸くシラミとの縁が切れた。

二十一年の秋か初冬の頃と思うが、捕虜用のハガキが配られた。家族持ちの人は喜んだ。自分が生きていることを知らせたい。人間として当然の感情であろう。

私はこのハガキは出さなかった。生きているこ

とを知らせたい気持ちはあるが、その気持ちより、たとえ赤十字のマークがあるにせよ「俘虜用」の文字にこだわったのである。俺は捕虜ではない、こんなハガキが出せるかと。若さゆえの恰好にこだわったのと、独身のせいかとも思う。

それはそれとして、ハガキに書く内容は、場所は書くな、作業内容イカン、天候ダメ、あれはイカン、これはダメでは、「皆さん元気ですか 私も元気です」これ以外書くことがないではないかと皆で大笑いになった。

寒さも極まれば痛さに通ずるという体験もした。零下三五度以下になると戸外作業は中止とか聞いたことがあるが、尼港では寒さのため戸外作業が中止されたという記憶はない。

温度計はないが、皆、北海道出身者なので気温は大体勘で分かる。「今日は寒いぞー」、朝、衛門前に整列しながら皆が言う。地平線に太陽が顔を出すのは九時過ぎだから、あたりはまだ暗い。首に手拭を巻き帽子を目深く被り、手製のマスクを

している。それが吐く息の水蒸気が凍るため真っ白になっている。

寒い。零下三十数度は間違いない。それに風がある。この寒いのに、今日は作業場が悪かった。アムールでの丸太揚げである。

現場に着くと吹き曝しなので風も一層強くなっている。軍隊では風速一メートルにつき体感温度は一度下がるといふ。従って今の体感温度は零下五〇度近いはずである。

監督は作業内容を指示してすくなくなってしまう。風上の方に顔を向けると、寒いのではなく痛いのである。頬つぺたが針で刺すようにキリキリする。皆は背を丸めて風下の方を向いて足踏みを始める。とても作業をするどころではなく、さりとてジツと立っている訳にもいかない。

カンボーイは、意地が悪いのか真面目なのか分からないが「ダワイ ラポート（作業をやれ）」と叫ぶ。顔が子供子供しているだけになおさら腹が立つ。

カンボーイがいくら怒鳴っても、しばらくは足踏みをしていたが、元気な田村兵長が「よし、やるか」と、ローム（金属棒）で丸太を掘り出し始めた。三本目の丸太を運搬中、私も手伝っていたが過って顔を丸太にぶつけ、左の眉毛の所に裂傷を作った。今でも鏡でこの傷痕を見ると、あそこは寒かったなあとアムールの川面を思い出す。

寒くてもうダメだと私は監督を探しに行き作業中止を交渉した。眉毛の傷が物をいったのか、「休憩小屋に入れ」となった。居丈高のカンボーイも本当は寒かったのだろう、ストーブの一番前に座り込んでいた。結局、この日は作業時間より休憩時間の方が長い一日となった。寒さが痛いと感じるような気温は、いくら北海道でも今は体験できない。

第三工場では、毎日同じ所に行くので顔も性格も分かるし、仕事の流れも分かってくる。

監督のサーハリニコフ、助手のイワン、事務のナーシャがいた。サーハリニコフは六十歳位か、

無口な小柄だが白髪、ワシ鼻のユダヤ系技術者。

イワンは三十過ぎの丸顔、人の良い典型的なスラブ人。ナーシャは二十位か、いつもニコニコの色白、丸顔の可愛い美人である。もつとも女つ氣のない日本人には、女性皆、超美人に見える。

ある日分かったのだが、日本では考えられないことであるがサーハリニコフは囚人だったのである。それはある冬の日、作業が終わり衛門前に並んでいた時、同じように傍らに囚人の一団がいた。その中にサーハリニコフがいたのである。

囚人が地方人の上に立ち、我々日本人捕虜を使っているのである。必要に迫られてか割り切つてか分からないが、日本人の感覚からすると理解できないことであつた。今から考えると、スターリン政策の犠牲者だったのかもしれない。もし私がロシア語に堪能ならば、いろいろな裏話が聞かれたかもしれないが、そんな訳にはならなかつた。

シベリア民主運動には、コムソモリスク以降そ

の渦中に巻き込まれたが、尼港に在る間は全然影響は受けなかつた。政治部将校が、何とか民主運動を盛り上げようと動き、一部の者が「日本新聞友の会」の部屋を作つたり食堂に壁新聞を貼つても、大多数の者は一顧だにしなかつた。実態は、民主運動より食ふこと、休むことに関心があつた。他からアクチブが来ることもなく、ラーゲル同士の横の連絡もない。もつとも一度ハバロフスクから誰かが来て、夜、食堂に集められたが、野次られて帰つて行つたこともあつた。

民主運動が盛んになつてきているのは感覚的には分かつてきたが、実感はわかなかつたし、対岸の火災視していた。

「全員元気で日本に帰ろう」が桑田中尉以下皆の以心伝心の合言葉で、作業場に行つても誰一人「我らが祖国、ソ同盟強化のために……」等とアジる者はいない。むしろ、米国が強制労働を強いるのなら話は分かる。だが、何で戦争もしないソ連のために働かねばならないのだ。ましてやこん

な少ない飯で、てめえ達のために働いておれるか。お身大切に、という気が強かった。

作業指揮官の仕事は、作業の遂行より何とか少しでもサボろう、休もうと、そのため監督やカンボーイに消極的抵抗をする（結局は負けるが）。

確かにノルマは言われた。しかし作業はマンマンデー（ゆっくり）である。文句を言われてもできないのはできない。働くだけ腹が減り、体力が消耗するだけの話である。

毎日、ダモイと食う話ばかり。春、アムールの氷が解けると「今年は」と期待に胸躍らせ、秋、アムールが結氷すれば「今年もダメか」と落胆する。コックリさんも随分協力してくれたがさっぱりである。

二十二年六月、本当に待ちに待ったダモイとなった。数梯団に分かれ、曳き船でハバロフスクに向かうという。

夕方、夕焼けの中にシルエットになって浮かび出た尼港の町並、丘の上の尼港事件の記念碑、本

当にキレイだった。

桑田中尉が全員を甲板上に整列させ、鎮魂のラッパを吹奏させた。万斛の涙をのみ、異郷朔北の地に眠る数百人の同胞の霊に最後の別れを告げる。夕焼けの尼港の空にラッパの音が高く低く流れていく。

最後の別れである。再び来ることもあるまい。墓参もかなうまい、サラバ御霊よ。サラバ尼港よ。許せよ。瞑せよ。

我々が引き揚げてラーゲルは閉鎖されたと思っていたが、十勝の野島さんから、二十七人が残され、この人達は翌年ダモイした。その中の一人が近くにいる旨の知らせがあった。

曳き船がコムソモリスクに着くと、将校全員と一部の下士官が下船を命ぜられた。残りはハバロフスク経由で七月ダモイしたという。

埠頭で作業をしていた日本兵が、階級章をつけた百人以上の将校団が通るのを目を丸くして見ていた。

我々は第八分所に入ったが、ここは関東軍司令部の作戦班長草地大佐を筆頭に、部長や参謀など佐官や尉官連中だけの将校ラーゲルであった。階級章をつけ、もちろん作業等やらない。

ソ連側や民主グループから見ると、極悪反動、軍国主義の塊りのラーゲルである。尼港の将校団も自動的に反動の一員になったのである。そして、これから二年間、反動として民主グループの吊るし上げの対象となり、ラーゲルのたらい回しが始まり、シベリア流れ流れて流浪の旅となったのである。

ラーゲルを移動する度に顔ぶれは変わり、人数も増減する。ここでは、四カ所のラーゲルを移動したが、第五分所では、「極悪反動草地一派」のレットテルのもと、二重柵で隔離された特別棟に入れられたこともある。

二十三年三月、アムールを渡り第一地区のムリーに送られた。ラーゲルの入り口には、レーニン、スターリンの絵、けばけばしいスローガンの

羅列である。入るなりもう罵声が飛んでくる。馴れているとはいえ、あまり安住の地ではないなと思った。

ピリピリした空気が渦を巻いている。朝夕の点呼では、必ずアクチブのリードで闘争歌を歌い、その後で「反動を叩き潰せ」「生かして日本へ帰すな」「白樺のこやしにしろ」等々のアジである。直接手を出すことはなかったが尋常の空気ではない。

草地大佐は、三十一年帰国後『関東軍参謀の証言』という本の中で、ここを「夜叉の収容所」と書いている。

六月にここからもダモイ列車が発売し、反動グループからも幾らかダモイしたが、残された反動グループは、ソフガワニに近いトムニンに移動した。この空気もムリーとあまり違わなかった。

この頃になると、生きて日本に帰れないかという気持ちになったこともあったが、まだ数十人も集まっている心強さからか、それ程落ち込むこ

ともなかった。

七月、ダモイが発表され、この中に私の名が入っていた。反動グループは、各貨車ごとに数人ずつ分散させられ、吊るし上げの対象にされながらナホトカに向かった。

左側に青い海が見える。ナホトカだ。たくさんテントもある。いよいよ日本だ。

喜びが実感として湧く間もないうちに、青山、和田、渡辺の三人は本部へ来いと言われ、いわく「お前達三人はダモイできない。ここから引き返す」と。瞬間、呆氣にとられ声も出ない。民主グループとしては、反動全員のダモイを阻止したいのだがそれはできない。それで名簿の初めの三人だけを選んだのでないかと思う。「野郎、やったな。民主グループのコン畜生」と心の中で怒鳴っても如何ともしがたい。折角ナホトカまで来ながら戻る口惜しさより、民主グループに対する怒りが大きかった。

誰かに怒りをぶつけることも、皆に別れを告げ

る暇も与えられず、三人はパンを受領し、二人のカンボーイと今降りたばかりの貨車でハバロフスクに逆送された。

ハバロフスクでは、二十一分所に二カ月程いた後、九月に十三分所に移された。

二十一分所にいるときに、今後どうするかと青山氏と話し合った。もう頼るべき仲間もない。そして、ナホトカから逆送という異常事態の後だけに目立つことはできない、作業をせざるを得ないかと。

随分前に、フランク・界が演ずる「私は貝になりたい」という映画やテレビがあった。平凡な理容師の主人公が応召、捕虜収容所勤務をし、後に上官は言葉巧みに無罪、主人公はBC級戦犯として絞首刑となる。「私は今度生まれ変わるなら貝になりたい」と言つて十三階段を上るというストーリーである。

私も正にその心境であった。それから、必要最小限度のことしかしゃべらない人間になつてし

まった。もつとも他の人も同じだったかもしれない。どこ出身で、どこの部落で、どこのラッゲルにいて階級などの日常会話は全然しない。単なる労働力にすぎない捕虜にはそんな会話は不要なのである。最大の関心事のダモイすら口にするのはタブーである。うっかり口にしようものなら、反ソ分子として批判されるのが落ちである。

十三分所に行つて見ると、若い洗脳された先鋭分子がアクチブやリーダーになっている。朝夕の点呼も、アジに始まりアジに終わる。隊列を組み、赤旗を先頭に闘争歌を歌つての作業場への往来であるが、作業から帰つて来ても作業反省会が終わらねば解散もできない。発言がないと日和見だと批判もされる。食事が終わると、今度は寝台上で、グループごとの討論会や輪読会である。

関東軍司令部の瀬島龍三中佐参謀（終戦時にジヤリコワで、秦総参謀長と停戦交渉をし、抑留中は、極東軍事裁判にソ連側証人として出廷し、帰国後は伊藤忠商事のトップとなり、中曽根康弘

首相のブレーンと言われた人）がいて、夜になるとアクチブのアジで吊るし上げの対象になっていた。また、関東軍報道部長の長谷川宇一大佐や、佐官の人も随分いた。尼港の将校も二人いたが、一人はアクチブなので、もう言葉を交わすこともなかった。ひたすら大衆の一員として目立たぬよう行動するだけである。

二十四年六月、ダモイで再びナホトカに行つたが、乗船まで三カ月待たされた。

この間、使役として日本人埋葬地に行き、遺体の埋め直しをさせられたことがある。その頃はまだ今のように整備されておらず、粗末な木柵に囲まれた不揃いの土饅頭であり、これを縦横揃えるため一度遺体を掘り出して埋め直す作業である。

また、ラッゲル内で、私が初年兵のときの教育助手で戦友だったS上等兵と、小学校の同級生のO君とすれ違ったことがある。懐かしかったが声をかけることはしなかった。もし相手が民主グループだったらとの警戒心が先に立ち、恐ろしく

て声をかけられなかったというのが本音である。
再び言うが「私は貝になりたい」、正にその心境であった。

八月二十九日、私の四年間の青春を埋めたシベリアを後に船に乗った。

いろいろなことがあった。貴重な経験もした。人間の本性も見た。そして今、周囲に誰一人知る人もない孤独な一人の人間として舞鶴の土を踏んだ。

その日は、昭和二十四年九月一日。船の名は「山澄丸」。

【執筆者の紹介】

出生 北海道砂川市

生年月日 大正十一年五月十五日

学歴 室蘭高等工業学校卒業

軍歴

昭和十八年十一月 現役入営 樺太上敷香歩兵

二五連隊

昭和十九年二月 技術部幹部候補生として、

戦車二二連隊に集合

昭和十九年九月 陸軍兵器学校に入学

昭和二十年六月 独立混成一二九旅団司令部

に転属

昭和二十年八月 終戦

昭和二十年十月 ニコライエフスク、コムソ

モリスクに収容される

帰国後

昭和二十四年九月 山澄丸にて舞鶴へ、帰国

後、高等学校教諭として奉

職

昭和五十七年三月 定年退職

自分史を十年前に一度出版したが、「九四年のシベリア墓参を書き残そうと再び筆を執った」との記事を新聞で見る。どのような内容か分からないが、五十部印刷して親類に配った。渡辺さんは、戦争は二度と起こしてはいけない、風化させないため子供たちにも悲惨な体験を伝えたい、と

話している記事を見て、この度『平和の礎』にと話を進めた。

(北海道 五十嵐 甚吉)

手記

北海道 坂本政年

一

①大正十(一九二一)年十月一日生まれ 函館市入舟町

昭和九(一九三四)年三月二十三日 市立幸尋常小学校卒業

同十一年三月二十三日 市立弥生尋常高等小学校高等科卒業

②祖母、父母、兄弟姉妹の九人家族

家業 鮮魚小売商

昭和十二年二月十九日 父死亡 四十六歳

自分が十五歳で家業を継ぐ。兄は足悪く入院の

日々であった。

二

①昭和十七年一月十日、在満要員として旭川北部第二部隊連隊砲中隊に現役として入隊。

②同十七年三月、東安省西東安滿州第八十八部隊に配属。

同十八年、初年兵教育係として勤務した。

同十八年八月、過労のため病に倒れ、西東安陸軍病院に入院。

牡丹江陸軍病院、南滿の興城陸軍病院に転院。

療養中、八十八部隊は南方並びに北支に転属。十九年秋に西東安病院に戻ってきたときは八十八部隊兵舎は空き家でした。

勤務部隊の命令あるまで西東安病院にて待機。

二十年一月、新設部隊に編入され、開拓農民召集兵、朝鮮人召集兵の初年兵係として教育任務につく。

二十年、師団命令にて第一線主力を南に下げ、東京城山中にて陣地構築作業。